

関東地域における飼料用米・稲発酵粗飼料兼用品種 「べこあおば」

寒冷地の多肥条件のもとで7年間平均で粗玄米収量が920kg/10aの超多収をあげている極大粒品種「べこあおば」ですが、関東地方のコシヒカリ栽培地帯においても800kg/10a以上の収量が得られ、飼料用米・稲発酵粗飼料(WCS)用米として利用できることが農研機構中央農業研究センターの研究から明らかとなりましたので紹介します。

☆ 技術の概要

1. 関東地域の早場米単作地帯における飼料用米として「べこあおば」を5月中旬に移植すると、7月末に出穂、9月中旬に成熟期に達し、収穫が可能で、早期栽培「コシヒカリ」との出穂期の差が小さいため、雀害の危険性は低く、用水利用体系にも適合して成熟期でもほとんど倒伏しません(表1)。
2. 「べこあおば」の玄米千粒重は30g以上の極大粒のため飼料用米としての識別性が高く、5月中旬の移植栽培では窒素施肥量15.2kg/10aの多肥条件で800kg/10a以上の粗玄米重が得られます。
3. 北関東米麦二毛作地帯で「べこあおば」を5月下旬以降の播種による湛水直播栽培を行った場合、多肥条件では黄熟期地際刈り乾物重は「ホシアオバ」と同程度となり、1500kg/10aを上回る乾物収量が得られます(表2)。

表1 移植栽培における飼料用米品種としての「べこあおば」の生育

試験年次	移植日	出穂期	成熟期	稈長 cm	倒伏 程度 0-4	穂数 本/m ²	1穂 当たり 粒数	玄米 千粒重 g	粗玄米重 kg/10a	全刈り籾収量 kg/10a
2008	5/13	7/29	9/10	76.3	0	325	99.7	31.8	813 (94)	937 (92)
2009	5/11	7/27	9/11	67.7	0	300	106.7	32.1	897 (97)	1007 (91)

移植機の栽植密度は21.2株/m²に設定

窒素施肥量15.2kg/10a(高度化成:7kg、LP70:4.2kg、LPS100:4kg)、全量基肥として施用
粗玄米重、玄米千粒重、全刈り籾収量は水分15%に補正、()内は「タカナリ」対比

表2 湛水直播栽培における稲発酵粗飼料用品種としての「べこあおば」の生育

試験年次	窒素 施肥量 kg/10a	播種日	乾籾 播種量 kg/10a	苗立ち 数 本/m ²	出穂期	黄熟期	稈長 cm	倒伏 程度 0-4	穂数 本/m ²	地際刈り 乾物重 kg/10a	穂の 比率 %
2002	12	6/7	6.9	149	8/26	10/1	78.3	0.4	403	1596 (100)	49.8
2003	10.4	5/30	5.0	85	8/24	9/28	73.8	0	390	1571 (97)	51.7
2004	8.4	6/2	5.2	103	8/14	9/17	67.9	0	350	1349	53.4
			3.8	75	8/14	9/17	69.5	0	312	1342	53.2
			2.4	50	8/15	9/17	69.1	0	317	1342	54.2
			4.7	98	9/3	10/6	65.9	0	332	1268	47.5
2007	8.3	5/23	3.6	73	9/3	10/6	66.1	0	276	1097	48.9
			2.3	47	9/4	10/6	65.6	0	283	1160	49.7
			4.0	59	8/12	9/12	74.3	1.1	293	1333	55.5

2003年の窒素施肥量10.4kg/10aのうち2kg/10aと、2007年の11.7kg/10aのうち3.4kg/10aはNK化成による効
穂形成期追肥、それ以外は被覆尿素を全量基肥として施用(混合比率は年次により異なる)
地際刈り乾物重の()内は「ホシアオバ」対比

表1,2は平成21年度「関東東海北陸農業」研究成果情報より

☆ 活用面での留意点

「べこあおば」は大粒であるため、育苗箱当たりの乾籾播種量を180gとしています。また、縮葉枯病に罹病性であるため、多発地帯での栽培は避ける必要があります。

詳細は中央農研・関東飼料イネ研究チーム(TEL:029-838-8817)にお問い合わせください。

(日本政策金融公庫 農林水産事業本部 テクニカルアドバイザー 矢島正晴)